

ふるさとの 植物を守ろう

No. 11 August 2013

植物園と市民で進める
植物多様性保全ニュース

Japan Association of Botanical Gardens
公益社団法人日本植物園協会

絶滅危惧植物の特性・保有情報の収集と利用の推進について

環境省新宿御苑管理事務所 関 勝雄

平成 25 年 6 月 28 日に環境省新宿御苑インフォメーションセンター・レクチャールームにおいて「絶滅危惧植物の特性・保有情報の収集と利用の推進」をテーマとしたワークショップを開催しました。植物多様性保全に取り組む全国の日本植物園協会の加盟植物園のスタッフ、賛助会員等 36 名が集まり、活発な意見交換等が行われ大変有意義な一日でした。ワークショップは 3 つのセッションを設けて行われ、セッション 1 では、「絶滅危惧植物の特性・保有情報収集の目的と実施方法の説明」をテーマとして、広島市植物園の世羅氏がコーディネーターとなり、筑波実験植物園の遊川氏が「特性・保有情報の収集の意義、コレクション構築への活用」、富山県中央植物園の神戸氏が「情報管理」、当職が「特性情報調査の進め方について」、システム作成者の池田氏が「web 入力システムのデモンストラーション」、高知県立牧野植物園の前田氏が「保有状況調査の進め方について」それぞれ説明を行いました。

このセッションの質疑応答では、参加者から活発な意見が出され、入力における課題が明らかになり、植物多様性保全拠点園のワーキンググループで引き続き検討していくことになりました。セッション 2 では、「野外調査で特性情報をどう記録し利用するか」をテーマとして、北里大学薬学部附属薬用植物園の福田氏がコーディネーターとなり、自然環境研究センターから小出氏、千葉氏を招いて講演と実演を行いました。

講演では、絶滅危惧植物の種子収集と生物学的特性に関する記録についての事例紹介、植物調査の専門家が行った場合の野外調査で記録する生物学的特性についての考え方、野外調査の実施にあたって必要な調査道具の紹介を行い、その後の実習では、参加者を交えた野外での記録シートの記入を行いました。

特に実習では参加者と記録方法について活発な意見交換が行われ、記入者の職種や経験により記入する内容にばらつきが生じることが明らかになったので、現地での記入方法等について、植物多様性保全拠点園の

ワーキンググループで引き続き検討していくことになりました。

セッション 3 では、「市民と連携した調査の進め方」をテーマに植物園協会専務理事の飯塚氏がコーディネーターとなり、東京大学小石川植物園の出野氏が小笠原希少植物の保全に係る関係機関との連携事例、東京都神代植物公園植物多様性センターの関田氏が、センターで行っている情報連絡会や東京都内の植物調査事例、当職が茨城生物の会と連携した種子保存の事例の説明を行いました。

今回のワークショップで提起された課題については、引き続き植物多様性保全拠点園のワーキンググループで検討を行うこと、また、絶滅危惧植物の特性・保有情報の調査は植物多様性保全拠点園が中心となり作業を進めることを確認して、ワークショップを閉会しました。

謝辞

一連の活動を支援していただきました独立行政法人環境再生保全機構にお礼申し上げます。また、日本植物園協会の会員各位、自然環境研究センター及びシステム入力の説明をいただいた池田様のお力添えにより実りのあるワークショップを実施出来たことに深く感謝いたします。



ワークショップの開催状況

報告

紀伊半島絶滅危惧種調査報告

大阪花の文化園 本田 高史, 京都府立植物園 長澤 淳一

近畿地方植物多様性保全拠点園は合同で紀伊半島の調査を行ったので報告します。

1, 日時: 11月5日(月)~6日(火)

2, 調査者

大阪花の文化園: 竹田 義, 本田高史

京都府立植物園: 肉戸裕行, 長澤淳一

3, 調査地点の概要

① SITE 1: 和歌山県(省略)

② SITE 2: 和歌山県

波が高いと海水を被る海岸の岩場にハマサジがハマアザミなどととも自生。

③ SITE 3: 和歌山県

ヤリテンツキが岬の芝生の中にヤマイトとも自生。

④ SITE 4: 和歌山県

川沿いの岸壁(北西向き)。水がしたり落ちる所にキイジョウロウホトトギス, シチョウゲ, キノクニスズカケがイワタバコ, イワヒバとも自生。

⑤ SITE 5: 和歌山県

滝の両側にキイジョウロウホトトギス。河原の岩上にキクシノブ, キノクニスズカケ, 上流にはナンカクランが着生。

⑥ SITE 6: 和歌山県

カキノキの株元にキイジョウロウホトトギスが着生。梅の木にクモランが着生。

⑦ SITE 7: 和歌山県

アキザキヤツシロランが河原の竹林内に自生。豪雨により自生量が激減。

⑧ SITE 8: 和歌山県(省略)

⑨ SITE 9: 和歌山県

道路建設時に作られた斜面にキイジョウロウホトトギス, キイトラッキョウなどが生育。金網内に保護され, 自生地の案内看板が設置されています。川向いにも自生していますが, 近寄れません。



調査の様子

⑩ SITE 10: 和歌山県

川沿いの北向きの急峻な岩上にアツイタ, ミヤマムギランが着生。アツイタは個体数が少なく, 生育も悪い。

⑪ SITE 11: 和歌山県

神社境内にキナンカンアオイの自生多数, 実生苗もあります。着生ランも多く, オサラン, フウラン, ムギランなどが大木の株元に多数落下していました。

4, 絶滅危惧種の生育状況

① キイジョウロウホトトギス

紀伊半島一帯に自生しており, 西は田辺市, 東は三重県, 北は奈良県まで。本来の生育地である川沿いの岩場のみならず, 道路建設に伴う法面にも多くの自生が見られました。自生量が多く, 栽培も容易。

② ヤリテンツキ

海岸付近の芝生の中にヤマイトとも自生。生育地が限られ個体も少数でした。芝生の刈り払いで開花が妨げられている可能性があります。またヤマイトとの競争に負けている可能性も考えられます。

③ ハマサジ

海岸の限られた場所で自生を確認。一稔性植物で開花結実した株と小さな実生苗が混在し, 自生地は安定して維持されているようにうかがえました。

④ キノクニスズカケ

川沿いの数か所で自生を確認。個体数は多くないものの生育は旺盛。ただし栄養的に繁殖することが多いので, 多様性がどの程度なのかは興味のあるところ。

⑤ ラン科植物

ミヤマムギラン, フウラン, オサラン, クモランなどの着生を観察。自生量は多く生育環境は良好。大木に着生することが多く, 伐採や倒木によって減る可能性があります。クモランは着生していた梅の木が切られ個体数が激減していました。その点で社叢林は重要。

⑥ シダ類

アツイタ, ナンカクランの着生シダを確認したが自生数はごくわずか。株も貧弱。

5, 採種許可など

調査と種子採集について, 各方面から口頭で了解をいただきました。

6, 調査協力

和歌山県在住の植物愛好家, 山本修平さんからヤリテンツキの自生情報をはじめとして貴重なアドバイスをいただきました。

公開シンポジウム「絶滅危惧植物を考えよう」

筑波実験植物園 國府方 吾郎

2013年5月30日、筑波実験植物園開園30周年を記念した公開シンポジウム「絶滅危惧植物を考えよう」を開催し、下の4名の方にそれぞれの分野から絶滅危惧植物についての講演をして頂きました。國府方吾郎（筑波実験植物園）「日本の絶滅危惧植物はいま」；阿部篤志（沖縄美ら島財団総合研究センター）「沖縄の絶滅危惧植物と保護・保全に向けた研究」；奥山雄大（筑波実験植物園）「花がつなぐ生き物の世界とその危機」；西廣淳（東邦大学）「絶滅危惧植物保全の取り組み～「愛知目標」の達成に向けて」

シンポジウムには一般の方を含む約120名もの参加者にお越し頂きました。また、当日は当園にて植物園協会大会が開催されていることもあり、多くの協会会員の方々も参加されました。各演者の講演は実例や美しい写真などを取り入れるなどわかりやすく、魅力的な内容で、かつ、それぞれの視点から絶滅危惧植物を的確に発信した充実した内容でした。また、質問や議

論が予想以上に活発に交わされ予定時間を大きく越えてしまうほどの大盛況で、タイトルにある「絶滅危惧植物を考えよう」を十分に達成できたと確信しています。同時に、植物園等の関係機関と一般社会の一体化が不可欠な生物多様性保全を行うためには、このようなイベントをより多く開催することが必要であることを実感しました。



会場の様子

薬効のある絶滅危惧植物の保全への取り組み

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園 今村 芳功

当園は1933年に「京都武田薬草園」の名称で、薬用植物の基礎研究を行う施設として創設されました。1945年に「京都試験農園」と改名し、長らく天然物由来の新しい医薬品の創出や薬用植物の収集と品種改良の研究を行ってきましたが、1994年の研究部門の移転に伴い、現在の名称である「京都薬用植物園」となり、薬用植物の収集と栽培を中心に活動してきました。2010年10月に事務棟と研修棟を新しく建築したことを機に、更なる薬用植物の収集・保全を進めるとともに、植物を取り入れた教育支援ができる施設として生まれ変わりました。この際に、英語表記をこれまでの「Kyoto Herbal Garden」から、役割を明文化し

た「Takeda Garden for Medicinal Plant Conservation, Kyoto」に変更しました。

当園は日本植物園協会の特定植物保全拠点園として薬効のある絶滅危惧植物に特化した生育域外保全に取り組み、現在71種を保有しています。当園における「保全」とは、単に種を保有することに留まらず、生育特性を解明・把握して持続的に種を維持できる状態にあることと認識しています。例えば、重要な薬用植物の一つであるムラサキについては、既に自生地が消失した京都府産の系統を用いて、胚の発達と発芽に必要な低温要求量の解明、二次代謝産物であるシコニンを生成する土壌・肥料条件の探索を進めながら、着実な次



生薬「紫根」の基原植物ムラサキ



開花時のオニバス

世代の採種に取り組んでいます。また、オニバスについては京都府で唯一の自生地から入手した系統を、ミシマサイコについては静岡県産と高知県産の系統をそれぞれ維持しながら、種子の成熟と発芽条件の解明を進めています。さらに、それらの種子の貯蔵条件につ

いても検討を実施しています。一方、環境省のカテゴリーには含まれていないものの、都道府県レベルでは絶滅が危惧される種について、その保全にも努めており、例えば滋賀県産のハマエンドウについては組織培養技術を活かした栄養繁殖法の検討を進めています。

新都心で楽しく学ぼう！沖縄の自然（生物多様性まつり）の開催について ●●●●●●●●

沖縄県環境生活部 自然保護課 自然保護班 照屋 直己

- 1 日時：平成 25 年 7 月 14 日（日）11:00～17:00
※台風の影響により 13 日（土）は中止。
- 2 会場：県立博物館・美術館周辺緑地帯
（沖縄県那覇市おもろまち）
- 3 出展者数：12 ブース（13 団体）
- 4 来場者数：約 3,000 名

沖縄県では、「生物多様性おきなわ戦略（H25.3）」を策定しており、その取組みの第一歩として「生物多様性」という言葉とその意味を多くの県民へ知っていただくために、県立博物館で開催される生物多様性特別展にあわせて、平成 25 年 7 月 14 日（日）に「生物多様性まつり」を開催しました。まつりでは「楽しく・体験して・学ぶ」をテーマに、関係団体の協力のもと計 12 のブースを設け、体験や展示などを通して沖縄の豊かな生物多様性が学べるようにし、併せてスタンプラリーも実施したところ、会場には開始前から多くの家族連れで賑わい、終了時刻まで各ブースで来場者が途絶えることはありませんでした。また、会場では、多くの来場者へ自然体験活動のプログラム集「ネイチャー・レシピ」を配布することができ、今回「生

物多様性」を知った子どもたちに対し、効果的に自然体験活動への誘導も行うことができました。まつりには約 3 千人の来場者があり、まつりを通して「生物多様性」を効果的に周知することができたと実感しています。今後も生物多様性について関心をもってもらえるような取組や情報発信に努めていきたいと考えます。

最後に、本まつりを開催するに当たり、ご協力を頂いた皆様に厚くお礼を申し上げます。



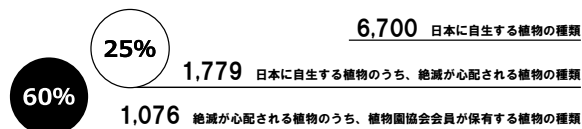
リュウキュウマツの積み木コーナー

ふるさとの植物を守ろう



絶滅危惧植物
Threatened Species

植物SOSマークの訴え



植物園協会の社会貢献活動の一例です。

このニュースレターが、植物とその保全に関する情報交換の場の一つとなるよう、工夫していきたいと思います。各地の諸団体の取組みもご紹介していきますので、共有したい情報やご意見を、下記の協会事務局宛にお寄せください。よろしくお願いいたします。



編集・発行：公益社団法人日本植物園協会

〒114-0014 東京都北区田端 1-15-11-201
TEL: 03-5685-1431 FAX: 03-5685-1453
URL: <http://syokubutsuen-kyokai.jp/>
E-mail: seed@syokubutsuen-kyokai.jp

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて制作しました